

Title	同盟罷工の原因に関する疑問 ( 下 )
Sub Title	
Author	根本, 清六
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.12 (1919. 12) ,p.1643(107)- 1651(115)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191201-0107">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191201-0107</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る資本主義的社會組織を覆して、社會主義的社會組織を樹立することが是認されるには、後者が前者よりもよりよき社會組織にして、よりよく文化價値の發現に貢獻あることを認識せられざるべからず。

(註一) Hermann Gorter: Der Historische Materialismus.  
E. (界利彦氏譯本に據れり。)

一〇

余はこゝに本論文を完了せんと欲す。吾人はマルクスの所説を眺め、或種の唯物論者の誇大なることを知れり。然れども凡そ人類の歴史中其の根本に極めて有力なるは經濟的要素なること論なし。

如何なる人類も自己を愛せざる者なく、かゝる自愛に「自己保存」と「自己主張」の二方面存し。そが「自己保存」を偏愛する時は本能的衝動生活たると理性的自由意思の生活たるを問はず

經濟的要素は極めて強調せられ、唯「自己保存」と「自己主張」が相矛盾撞着する時に、後者の力が精神的要素の強大なるを意識せしむるなり。斯如く經濟的要素が人生全般に對して強大なる力を有するが故に、生産手段の進化は社會全般の進化發展を期待し、社會組織の改造は生産手段の如何に依つて左右さる。

唯吾人の精神的要素は、時に是等の生産手段と没交渉に一向に文化價値實現のために努力することあり。此の種の「自己主張」は遂に經濟的要素、換言すれば社會の多數者の力を以つてすると雖も如何ともなし能はざるなり。これ精神的要素の最大なる強味なりとす。

然乍ら人類發展の歴史は生産手段の如何に依つて自然科学的因果律に依つてのみ形成さるゝものにあらず。文化價値を實現せんとする目的論的考察に依つて、觀察され、又これに依つて

其の經濟的發展も精神的發展も是正さるべく、こゝに道德律の存在を認識し、歴史上の偉人を渴仰するに至るなり。

斯して本論文の當初の目的たる經濟的史觀論の價值、即ちこれと文化價値との關係如何に關して、略々論究せりと信す。

翻つて本論文を起草せる時を思ふに、すでに數ヶ月を閲みし、徒らに冗漫の議論を弄し説かべき要點を逸し去れること多きを恐る。唯余一個として見れば、余自身が經濟史的研究の態度を明確にし、整頓し、多様多端なる社會事象を研究する理論的根據を幾分なりとも把握し得たる點に就て、必ずしも徒勞ならざりしこと、信ず。唯他日再び此の種の研究に充分なる是正を加へて、足らざるを補足するの機あらんことを期す。

(一九一九年一〇月一九日稿了)

同盟罷工の原因に  
關する疑問(下)

根本清 六

三

今、その意見を簡單に紹介すれば、先づ『要之、若し一部論者の言の如く、賃銀算定法にして其土地、其時に於ける物價の昂騰率に比例するを以て、其必要條件なりと假定せば、昨年十二月中一般賃銀は大體次の如き引上をなすを以て妥當とし』云々とあれ共、吾人の第一に疑問とするは昂騰率に比例し云々とありて、その反對なる低落率に比例し云々を度外視することなり、これに關しては後に詳述するも、所謂一部論者なるもの、説は甚しき偏見なりと云はざる可からず、更に『大正七年十二月中妥當賃銀の算定法』と題して『即ち三割五分の値上となすを

至當とす』との結論に達し居れり、所謂妥當賃銀の算定法なるものは茲に省略す可きも、大體に於ては、前記の物價昂騰率に比例するを以て原則となしたるものなりと云へは一言にして足る、從てその後の物價昂騰率に準して必ずしも三割五分引上に限定せざるは勿論なり、吾人はこれより仔細に該意見に關する疑問を列擧し、同時にかくの如き基礎の上に立てる同盟罷工の理由なるものが、不合理極るものたるを明白にせむと欲す、第一の疑問は該調査中賃銀と稱するものは米搗、袋物職、和洋服仕立職、經師職、左官職、植木職、機織職、陶器轆轤職、塗師職、鋳職、染物職、木挽職、大工職、瓦葺職、屋根職、煉瓦製造職、指物職、疊刺職、建具職、石工職、植木職、日本菓子職、下駄職、靴職、馬具職、車製造職、紙漉職、鑄物職、鍛冶職、綿打職、活字植職、版摺職、船大工職、桶職、杜

氏、醬油造職、漁夫、日雇人夫、下男、下女の東京市に於ける賃銀指數を平均したるものなるが、一見して直ちに知る如く、その大部分は實に工場外職人なりとす、未だ本邦には國勢調査の行はれたることなく、又完全なる職業統計も具備せられざるが故に、只概算を示すに止めむに、全國に於ける小作農は八百三十四萬二千九百四人、漁業労働者は一百三十九萬四千四百七十九人、鑛山労働者は四十三萬三千八百四十三人、私設工場労働者は二百四十五萬六千五百五十五人、官設工場労働者は十二萬四千八百七十九人を算し、その合計一千一百七十五萬二千六百二十人に達せり、而してこの外にも工場法の適用を受けざる小企業労働者、商店員、徒弟を初め、水上労働者、海員、人足、車夫馬丁、更に下りては生活根據の一定せざる浮動的労働者もありて、その員數の夥しきこと想像に餘りあり、今

これを前記東京市に於ける米搗以下、下女下男に至る四十種の員數と比すれば、その差隔は餘りに大にして、從てこれ等東京市に於ける四十種職人工の平均賃銀指數の如きは、全國の勞働問題の資料としては殆むと應用す可からざる小規模の範圍に止まるものとす、素より一部論者なるものも其土地、其時に於ける物價昂騰率云々と限定しあれ共、かくの如き局限は熱狂せる罷工發動者の能く留意する所となるや否や大に疑なき能はず、否、時としてはこの局限を承知しつゝも、宣傳を有利ならしむる爲めに故意にこれを曲用するものもなきにあらざる可し、今や勞働問題の前途頗る容易ならざるものあるに際して、誤りて好曲なる罷工發動者の爲めに乘せられたりと假定せば、豈その不用意の責を負ふもの、一部論者の如きに止まらむや、第二の疑問は、その平均賃銀なるものも吾人の所謂實

收入と稱するもの、意味とは異なりて、單に、これのみを以て直ちに職工の平均收入の全部となすは、少しく早計に失せるものと云ふ可し、況むや、四十種の職人工中に在りてもその大部分は、必ずしも所定の賃銀額のみによりて生活の難易を決し得可きもの、みにあらず、若し下女の賃銀が五圓なりと假定して、その三割五分の引上を妥當なりと主張するも、雇主側に於てこれに應ずして却て下女を解雇し、又は二人使用せるものを一人に減せば如何、所謂妥當賃銀の効果は何處にありや、要するに被備乃ち就業日數の多少と、就業件數の多少と、換言すれば勞働量の總計が實際の生活問題を決するものにして、戦前に於ては物價低廉なりしも、これと同時に不景氣にして被備就業日數及び件數も少數に止まりしに反し、目下は物價も騰貴したれ共、これと共に被備就業件數及び日數も著し

増加したりとせば、必ずしも賃銀の引上を待たずして、而も能く物價騰貴に對抗し得るにわらずや、この明白なる道理を考量に入ることなくして、物價の騰貴せる一方に就業量の激増せるの事實を閑却し漫然として物價の昂騰率に比例することのみを以て賃銀算定法の必要條件となすが如きは、猶、研究の餘地を存するものにあらざるなきか、第三の疑問は所謂物價の昂騰率なるもの、基礎として用いられたるは、物價指數の平均なるが、その物價指數の個々に就て點檢すれば米、大麥、裸麥、小麥、大豆、小豆、食鹽、清酒、醬油、味噌、茶、鯉節、牛肉、鶏卵、牛乳、梅干、澤庵、和砂糖、和赤砂糖、和産線綿、洋産線綿、紡績綿絲、洋産綿絲、晒木綿、洋産生金巾、晒金巾、生絲、茶色絹、甲斐絹、麻、藍玉、和塊鐵、洋塊鐵、洋釘、松角材、杉角材、樺角材、樅角材、松、杉、屋根板

石油、石炭、薪、木炭、藁、秣草、美濃紙、半紙、干鰯、鯉、榨滓、油粕の五十二種なれ共、その中には労働者の賃銀と對照するに適せざるものも尠なからず、換言すれば、労働者の生活資料の程度内容とは餘りに交渉を見ざるものなきにあらず、況むや、物價指數の平均と賃銀指數の平均とを對照するに當りて、その起算點たる基準年度に於ては、果して賃銀と物價とが水準を維持したりしや否やに關しては、毫も説明する所なく、恰もその水準を確認し居るが如き觀ある第四の疑問なり。

四

吾人は敢て云はむと欲す、百尺竿頭一步を進めて何故に最低賃銀制度を主張せざる乎、又何故に労働組合の力に由りて賃銀を決定すること提唱せざる乎、賃銀の決定を以て労働力需要供給の交渉に委すること今日の如きに於て、又

これを相互の自由契約に放任する現制度の下に於て、猶敢て妥當賃銀なるものを主張し得るか況むや、妥當賃銀と云ふが如きはその用語の不徹底なる、その内容の模糊たる、求めて人の誤解を招くものにあらずして何ぞや、又況むや、如何にせばその所謂妥當賃銀なるものを要求し得るやの一事に至りては、何等これに關して説明する所もなく、動もすれば同盟罷工に悪用せらるゝの状ある所以にあらずや、而も、これを善用すると悪用するとに拘はらず、同盟罷工の力に由りてこれを要求し得るものは可なり、労働力の性質上集團をなさずして、個々に分散しこれを要求し得ざる種類の労働者に至りては、那邊に向つてこれか妥當の實現を期し得るや、サボタージュを以てすれば勞力の需要者忽ち去りて就業の件數頓に減せむ、値上を以てするもその運命は略等しからむ、若し徒らに輕舉に出て

むか、これが爲めには就業日數と件數とは激減して、苦心の値上はその實收額に於て不結果を生せむのみ、今や、労働問題の啓蒙期に際して、安價なる労働問題を口にし、能く人の理解し難き賃銀引上論を唱ふるものあらば、些も労働問題の解決に資する所以ならざるのみならず、却てその前途を壅塞しその光明を掩ふものと云はざる可からず、かの新聞印刷職工の一擧が如何に世の同情を失いしかを見て思半に過きむ、而も、妥當賃銀の決定法なるものが、其の土地、其時に於ける物價の昂騰率に比例するを以て、其必要條件なりとなす以上は、その反面に於ては、其土地、其時に於ける物價の低落率に比例して、引下くるの一事をも併せて認容せざる可からず、換言すれば、物價低落すれば賃銀も從て低落することに異議ある可からざる筈にして果して然らば、労働を以て全く貨物の一種とな

すの結論に到着せざるなきか、かくの如きは世界の大勢と斷して一致す可からざる時代錯誤の議論となす可し、しかのみならず、一朝にして經濟界に反動の襲來し、物價の趨勢一度逆轉せんか、その妥當貸銀說乃ち値上説は忽ちにして瓦解し忽ちにして消滅せむのみ、毫も永久的効果あるものにあらざるなり、唯それ、理論としてはこの場合引下を妥當とせむも、労働者がこれを承認せざる時は如何にしてその間に處す可きや、その一例としては近時英國に突發したる鐵道従業員の大罷業の場合これに相當す可し聞く所に依れば英國鐵道従業員の要求なるものは、戰時特別手當を含む現時の支給を、今後永久に繼續す可しと云ふに在れども、これに對して英國政府は本年十二月三十一日までは現額を支給し、その後は多少これを引下くる心なるも若し物價にして今日以下に低落せざるに於ては

引續き戰時支給をなす可しと聲明したるにも拘はらず、鐵道従業員は飽くまでその主張を固執し、遂に世界未曾有の大同盟罷業に及べるものなりと云へり、乃ち今所謂妥當貸銀なるものは時としてはその引下をも主張するものなりとせば、労働を以て商品視するの非難を免れず、又引下を度外視するものなりとせば妥當なる辭に反するのみならず、而も引下を労働者の承認せざることを、前掲英國鐵道従業員に於けるが如き場合に立至らば、恐らくは策の施す所ある可からざるなり、これ豈人の子を驅つて無解決、暗黒の裡に彷徨せしむるものにあらずや、結局所謂妥當貸銀說なるものは労働者それ自身の怨嗟を蒙るが如き奇觀を呈することなくむは幸なり。

五

單に漫然として物價指數の平均を掲げ、これ

を貸銀指數と對照して、その不及部分を充足し、物價指數の平均と貸銀指數の平均とか水準を保持するに至りて、これを妥當貸銀なりと喜ぶものあらば、事態頗る簡單なりと雖も、真正の労働運動の要求かしかく單純なるものにあらず、又しかく唯物的に偏するものにあらざるは何人も容易に知り得る所なり、免も角も、本邦の現狀に在りては労働問題の重要なことも列國に劣らすと雖も、これと同時に産業の發達をも閑却す可からず、これを閑却せんか遂に労働問題の爲めにも不利なる結果を招くに至らむ、妄りに労働問題の渦中に没頭して、産業の發達を忘却するものありとせば、かくの如きは吾人の取らざる所なり、況むや、妥當貸銀說の如きも、賃銀を以て労働力の需要供給關係に由て決定する今日に於ては、實際上に幾何の効果をも期待し難きものにして、これが爲めに紛議を重ね就

業數を減することもあらば、國民經濟上それだけの損失あるを覺悟せざる可からず、所詮労働者に取りても頼み少きものにして、特に産業の般賑なること目下の如きに際しては、労働力の需要は殆むとその供給に幾倍す可く、從て實收の寡小なる理由はあり得可からず、若し餘りに不合理ならばこれを去て他の適する所に赴くも可なり、労働者が他の階級に比して有利なる地位に安むしつゝある今日、特に生活困難の爲めのみにて同盟罷工を發動しつゝありとは、吾人の遂に首肯し能はざる所なり、又果して生活困難の爲めなりとせば、罷工に由りて收め得たる増額は當面の必需に差向けられて、左したる餘剩もあらざる可き筈なるに、事實は全くこれと相反して、滔々相率いて豪奢成金の流風一世を壓するの狀あるは何故ぞ、今や世を舉げて、同盟罷工に對する同情を失却し、これを嫌惡する

の心掩ふ可からざるものあるは實にこれが爲めなり、素より多數の同盟罷工中には玉石混交し合理的のものも時としては不合理的のものに累せられて、その真相を没却せらるゝものもあらむ、されどその根本理由としては、鞏固堅實にして理路井然、一世の信望を繋ぐに足る何物も遂にその同盟罷工宣言中に發見することなければなり、本邦國民が目下急速力を以て、社會的に自覺しつゝあるは争ふ可からざる事實にして殊に昨今の物價騰貴が資本家の買占、賣惜に因るにあらざるなきかを疑はしめ、資本家と共に生産に従事する労働者の心を騙りて、資本家の利益と労働者の利益との不一致を感得せしめたるは慥なる事實にして、又同時に資本家級と相對立する労働者級なるもの、抗争觀念を強めたるも否定す可からず、勿論その中に在りて野性的なる階級的嫉視反感も交り居るに相違なく、

又英國に於ける義勇兵の募集が、労働者に哀願愁訴して辛ふして戦局を支持したる等の事例を聞知し、更に諸外國に於ける労働運動の壯觀に魂を奪はれ、心事漸く高く又少しく平かならざるに乗して、政黨末社の徒なぞがこれを外部より煽動するものあり、かゝる煽動者中の或者は、その心術に於て投機者流と選む所なく、人の輕忽淺慮なるに附入りて、好みて狂暴の辭を列ね以て名と金とを得むとするもの、存在するを拒む可からず、結局労働者がこの輩の乘する所となり、妄りに業務を罷め徒らに争ふも、遂に幾何の効果を收め得可きぞ、労働者の爲めに切に自重自愛を望む所なり、勿論現在の産業組織とは別個の組織の下に於て、労働者が生産高中より別に收得するの至當なるやに關しては、自ら別種の問題に屬し、本短稿のこれを能く説き盡す所にあらず、要するに目下本邦に於ける労働

問題の聲は頗る大なれ共、これ果して生活問題の上に立てる眞正の運動なりや、否、餘りに物資方面の要求にのみ傾きて、却て温良なる人の心を失ふものなきにあらざるか、或は又これが爲めに却て他日労働運動の爲めに禍を胎すことなきか、吾人は本邦の同盟罷工の原因に關して一個の疑問を抱かざるを得ず。(十月十三日稿)

シアール・ジード氏經濟  
原論第四版と第三版米  
國譯との比較

臼井鏡太郎

嵐の前の静寂にも例へつべき第廿世紀初葉の所謂「武裝的平和」は、バルカンの一隅に戦亂の導火を發し、世界の列強を始め大小數十ヶ國、

俱に相引き相誘ひて等しく其渦中に投じ、中立を守りし邦家と雖も其の影響を蒙らざるもの、殆ど是有らざりしなり。一度戦渦治まれば、雖も、必ず大小の創痍を負はざるはあらず、勝國中に於て特に其甚しきは佛蘭西ならずんばあらず、悪戦苦闘、幸にして、戦勝の光榮を得しと雖も、勝利は彼に取りて如何なる利益を齎らせしか。今は唯だ徒らに榮光に酔ひ、故國の花に狂はむとするの時期に在らず、殊に戦亂の結果幾多の社會問題は簇生せり、世界改造の壯圖は企てられたり。彼等は如何にして之に對せんとするか。

佛蘭西經濟學界は先きに其耆宿ルロワ・ポリユエーを失ひ、航海者の指針を奪れたるが如かりしが、彼を併ひ稱せられたる、シアール・ジード氏の幸にして猶ほ健在なるありて、聲を大にし、筆を呵して、雜誌に著書に其の意見を發表せり